

印度との交通には四つの経路がありそのうち最重要なる二つの経路はペシヤワル(Peshawar)からカイバ峠(Khyber Pass)を通じてゼラバド(Jalabad)及びカブール(Kabul)に至るものが一つ。他の一はクエッタ(Quetta)からポーランド(Bolan Pass)を通じてカンダハル(Kandahar)に至るものである。

新著紹介

○支那及滿洲地誌並地圖目錄類

近來内外各圖書館所藏にかゝる支那及滿洲に關する地誌及地圖の目錄が公にされたことは支那及滿洲の地理研究者にとりて大なる幸である。紹介者の蒐集萬目せるものを列記して見る。

國立北平圖書館方志目錄 譚新嘉 譚其讓編 民國二十二年五月 四冊(二元五角) 本目錄は支那地誌目錄として空前のものと思ふべく、採録五千二百餘部、複出を除き三千八百四十四種に及ぶ。其の所藏本の主體は清末内閣大庫にありし千數百部で既に其の目錄は江陰繆綸學部圖書館方志目として刊行されてゐるさうである。爾來國子監より移藏するもの、教

育部の徵集にかゝるもの、購入又は寄贈によるもの、之に加ふるに京師圖書館、北海圖書館舊藏のものを以てし、遂に五千二百餘部の集收を見たのである。目錄載する所は省府廳州縣志を主とし兼ねて邊鎮志衛志所志關志場志鹽井志等に及び附錄として清末の郷土志及鄉鎮志を掲げてある。各省に別つて列載してあるが福建には臺灣を附載し臺灣府志以下七部を擧げてある。遼寧に五十五部、吉林に六部、黑龍江に二十一部、熱河に三部を掲げてある。無論河北河南山東等のものは百數十部以上に達し殊に山東の如きは紙數三十七枚を費してある。支那地誌の偉觀は本目錄によつて萬丈の氣焰を擧げてゐると云へる。

金陵大學圖書館方志目 民國二十二年一月 一冊(一元)

これは洋紙横組の頁數一一八の小本である。南京の金陵大學では民國十二年以來收藏したもので當時は每冊銀一、二角を普通としたが民國十六七年以來は求者多き爲め每冊一、二円から十円になつて收集が困難となつた、それでも遂に本目錄に載する二千百四種、二萬二千五百六冊となつた。本目錄では江蘇に於て二百五部二千二百四十一冊を擧げてあり、遼寧では通志一部府志三部縣志十五部其他二部計二十一部九十冊、吉林では通志一部府志一部縣志六部其他一部計九部八十五冊、黑龍江で通志一部府志一部縣志十三部其他一部計十六部二十二冊、熱河で府志一部二十四冊を擧げて居る。本目錄には重出は一切掲げて居ない。一體支那には地誌が二萬種位は

あるらしく、北平圖書館には前記の三千八百四十四種、之に次いだのは上海東方圖書館の二千六百四十一種であつたがこれは焼けた。金陵大學のものは之に次ぐものである。

大連圖書館和漢圖書分類目錄 第四編歷史傳記地誌 昭和八年三月 本目錄中支那地誌は第二六三頁より第三六三頁に亘つて居るが滿蒙地誌はこの編には入れられてない。又地方誌許りでなく紀行案内記山河湖沼海洋陵墓雜書地圖も挙げられ猶前記の兩目錄にない叢書も採録されてゐる。日本刊行のものも勿論編入されてゐる。山東省に挙げられたものうちから府州縣志を選摘すると百九部許ある。著しい支那地誌目錄と云つてよい。

滿蒙地誌目錄としては植野武雄氏述滿洲地理文獻考が滿鐵圖書館發行の書香第三十八號に載つてをるさうである、紹介者は未だ之を寓目する機を得ないが植野氏の編された滿洲府縣志表は大連の書肆右文館の滿蒙關係文獻目錄中に摘録されてゐる。其數百二十五部の多きに及んでゐる。本表で著しいことは民國十年以來の刊行本が三十一部に達してゐることである。

次に支那地圖目錄として左の二目錄を挙げたい。

支那地圖目錄 昭和五年十月 大連圖書館

中文輿圖目錄 王庸 茅乃文編 民國二十二年四月 北平

圖書館 (一元)

前者は大連圖書館所藏の支那に於て編製せられた支那地圖

を蒐録したもので其本體は伊太利公使館員ロヌ氏が在支三十二年間に蒐集したものを收蔵したものである。總計四百五十一部ある。支那地圖展覽會用として急遽編纂したものである爲め縮尺の擧げてないものが多い。滿洲蒙古で五十四種を採録してある。

後者は北平圖書館輿圖部に所藏する二千餘種の目錄で支那地圖を主とするが之に加ふるに世界及各國の地圖、類圖として天文、地形、山脈、河工水利、地質、交通、民族、歴史等の地圖類をも併せ列載してゐる。遼寧で四十一種、吉林で十九種、黑龍江で十二種を數へる。

因に云ふ外國製支那古地圖に就いては山崎直方博士所藏内外古地圖並錦繪陳列目錄(昭和五年)、朝鮮古地圖展觀目錄(昭和七年十月京城帝國大學開學式記念)、天正使節渡歐三百五十年記念珍藏展覽會目錄附錄東亞古地圖目錄(昭和七年十一月丸善株式會社)等に數種つゞ掲げられてゐるのが近時の地圖目錄中に囑目された。(中村)

〇一九三一年の巴里國際地理學會報告書

第一卷 學會記事及び第一部門(測圖學及び圖學) 第二

卷 第一冊 第二部門(自然地理學) アルマン コラン

書店發行 一九三二—三三年。

Comptes Rendus du Congrès International de
Géographie, Paris 1931.

Tome I, Actes du Congrès, Travaux de la section I (topographie et cartographie). Tome II, Premier fascicule, Travaux de la section II (géographie physique). Librairie Armand Colin, Paris, 1932—33.

八月も終に近いある日、ゆくりなくもこの報告書を手にすることを得たのは全く望外の幸であつた。本報告書は劍橋の學會の報告書に比較すると甚だ内容豊富であつて、とても短時に通讀する事は出来ないから、こゝでは取敢えず大略を紹介して置く事にする。本書は大部分が佛語で書かれてあるから、精しいことは追々佛語の得意な人に譯してでも貰ふことにして置く。然もこの報告書は未完であつて、生物地理の部は近々出版さるべく、又人文地理、歴史地理、文獻及び地理教育等の部門も本年末までには上梓との事であるから、完結の上は立派なものになることゝ想像される。

論文の紹介に先立つて、本邦代表の活動及び本邦の地理學の成果を示すために陳列された地圖や、書物のことに就いて一言して置くのも無駄ではあるまいと思ふ。日本からは小田内、辻村、本間、多田等の諸氏が出席せられ、又總元締格で田中館博士が臨席せられたのであるが、小田内氏が人文地理の部門で「日本の地方人口の研究」及び「日本の田園占居に就いて」を發表し、ミショット、ドマンジョン、レーマン等の疑問に答へて居る外は一寸見當らないのである。(數度讀直したのであるが見落しがあつたら御宿しを願ふ次第である。)

もつともこの外に陸地測量部の事業報告や、田中館博士の日本式ローマ字の御議論などもあるにはあるが、どうもこれは本筋の地理の論文とは考え難い様である。

當時内地で「巴里の人文地理展覽會」といはれて居つたものに、實際陳列された地圖類は左の通りである。

陸地測量部發行 二百萬分の一 日本全圖

土地利用に關する圖表(三十葉)

一七六〇年測量の盛岡の圖

長崎の圖(二葉)

東京の人口(十六葉)

京都の圖(二葉)

奈良の圖(一葉)

横濱の發達を示す圖

關東の人口分布圖

五萬分の一 ミノワ(?)の圖

五萬分の一 琵琶湖の圖

日本の田園占居(二十二葉 小田内氏出品)

日本人口密度圖(十一葉)

東京附近の農産物分布圖

田園占居の圖(圖及び表 九葉)

耕地分布圖(石田氏出品)

胡麻郷(?)附近の神社の圖(津野氏?出品)

右の様な申分のない立派な品々である。唯々多少古くなつ

たものが混つて居るのは残念ではあるが、同時に展覽された書物に比べれば確かに大分勝つて居る。書物は鐵道省の案内記が大部分であつて、この様な席に展覽されるには不似合なものが相當多量に出されて居る。Geographie regionale du Japon. といふ本が出て居るからこれは珍しいと思ふと、出版所が改造社及び新光社となつて居るから、ハハハと頷かれるのである。將來はこのやうな際に出品するものは充分厳選することが必要であると感じた次第である。

扱第一部門に於いて目立つのは空中寫眞の利用である。これは決して空中寫眞に表現された形態が美的であるといふやうな、藝術的にして非科學的なものではなく、もつと遙かにしつかりした立場に立つたものだといふ事を特に斷つて置く。地圖に於ける表現の技巧に關する論文は八つあるが圖が殆んど挿入されて居らぬため著しく難解である。唯ザボルスキーの傾斜、起伏、及び平坦度を同時に考慮した方法は、圖も入れてあり、佛語の丁寧な説明もあるので、以前の波語に英語の摘要を附けて發表したものよりは大分判りよい。この様な研究法は起伏の小さい地方の地誌を作るときは大に必要である。地理眼などではこのやうな量的關係が分るものではない。正確な地圖を早く作ることは熱帯では特に困難である。と見えて、これに就いて五つの論文が提出されて居る。各國の測量事業の現況に關する報告に次いで、種々の圖的表現なる項目があるけれども、新版の地圖の紹介が主であつて、

ロメル、ヒブソングラフォイドに關する論文と、ツエッペリンの北氷洋探險との二つが異彩であるが、ロメルの方法も餘り目新らしくはないし、ツエッペリンの方も他に完備した報告が出て居るから大した事もなさうである。一體に圖が省略されすぎて居て充分に理解されぬのは遺憾である。

第二部門は地形學と氣候學とであるが、地形學の方が壓倒的に多い。その中でも段丘と侵蝕平坦面とが斷然優勢で、獨逸と北歐とを除外して考へれば、現在の最高水準を示すものといふ事が出来る。

卷頭の段丘調査會の委員長の綜合報告は公平な立場から書かれたもので、一讀して現在の知識を得ることが出来る。文獻も豊富についてゐる。デュボアの舊汀線研究法は主として地質學的であり、著しい進歩や新らしい着眼は認められないジョンソンの段丘對比法は大に期待して居たのだが、これでは餘りに抽象的でとても野外作業の際に役に立ちさうにもない。惡く取るとこの論文は一の空論に過ぎざること、恰も我國の何等研究らしい研究も行はず、單に擬似方法論（眞の方法論ではない）を偉さうに吹いて居る連中と同一とも取れるが、紹介者はジョンソンの經歷から推して、近い將來に於いてその理論を研究論文として發表するだらうといふ事を、從つて我國の法螺吹きとは自ら類を異にするといふ事を信ずるものである。ジョンソンの論文とよい對照を見せて居るのはダンネルである。ダンネルの論文はジョンソンの主張した方法

を早くも實地研究に用ひて居る觀があり、別に聲を大にして「自分の方法」などとは吹かないが、この論文を一讀すればタンネルの主張はハッキリと理解されるのである。科學者はかくありたきものだと思ふ。猶フィンランドに於てさへ舊汀線が氷期後に斷層運動で變位して居るといふことは興味深い事實である。

段丘の地形誌的研究は世界の各地から集つて來て、實に十八の多きに達して居る。この様に報告が増加して行けば、段丘の地質時代は必しも嚴密に決定されなくとも、ある範圍内だといふ事さへ確め得れば取扱方によつては相當正確な結論が出し得るといふことは注意すべき點である。これらの多くの報告の中でフルマリエのミューズ下流の研究は力作であるが、結論は簡單な傾動に近い。それにも拘らず、討論に於て海面變化との關係が問題になるのは、何と云つてもユースタティストの天國だからであらう。伊語の論文が二三あるけれども何れも理解し難いのは残念である。レンセウキツはヴイスチュールとドニエプルとの河岸段丘を對比し、フェルリオはバタゴニア地方で同様の研究を行つて居る。環太平洋地域から、サンドフォード、ジョンソン、ステイヤースによつて、夫々の立場から海面變化を肯定した論文が呈出された事も注意に値するものであらう。

侵蝕平坦面の研究は十九編に達して一偉觀であるが、唯ドマルトンスのやうに、Piedmontの語源に就いて下らない議

論をしたりせずに、獨塊と提携すれば一層よかつたと思はれる。その上前以つて問題を主としてフランスに於ける實例と限定したため、種々の論文を提出することを妨げた傾向があるのは残念であつた。従つて研究方法もフランス流のものが多數で、餘り新味を出さないといふ結果に終つて居る。リン-tonの着實な研究、ジョルジュの特色ある研究、フォツセラのスペインに於ける研究、ノルドンの東部カルパーテンに於ける研究等が特に目立つて居た。

その他水河から出る流水、川の爭奪と人文との關係カルスト地形、半乾燥地や濕潤地の地形、内陸砂丘等の題目に就いて多くの研究が發表されて居るが、一切省略して氣候學の方を一瞥しやう。

氣候學は氣候變化と局部氣候とに分たれて居る。氣候變化では、ブティージャンが在來の方法で1881—1911の期間を調べ、一二の結論を出して居る。エギニティスによれば、古來よりギリシャでは著しい氣候變化は見られなかつたといふが、討論に於て大分反對意見が出て居る。サットンはエデプトの氣候變化について、尠くとも過去二三千年間に於ては一方向的に變化したとは認められなかつたと述べて居る。サンソンは1885年位よりこのかたの觀測材料を用ひてセーヌ・オアーズ縣の氣候變化を調べ、これと農業との關係を求めて居る。ブラチエは1811—1925に就いて乾燥指數を算出しその變化の有様を説明して居る。ヴジェヴィツチのユーゴスラビアに於

ける氣候變化は材料だけで殆んどコナしてない有様である。概観して新らしい立場から研究した様な論文が一つも見當らないのは淋しい氣がしないでもない。

局部氣候の方は題目も新しいから多少生々として居る。この中には微氣候の外に氣候誌をも含んで居るのは注意を要する。ブルックスは實例を掲げて微氣候を説明し、調査方法としては、細かい觀測網を張るよりも、移動觀測を行ふ方がよろしいと斷じて居る。この意見にはイエーガーもレーマンも賛意を表して居るのであつて、ブルックスも云つて居る様に觀測材料を蒐めることが目下の微氣候學の發達には最も有用である。精度の大なる觀測は勿論望ましいけれども、現在位の精度でも意味ある結果に達して居ることは多くの微氣候の報文が示して居るのだから、餘り註文をつけないやうにして材料を集めて行くのが穩當なやり方だと思ふ。シャプタルの論文は方法論に墮していき、か内容空虚である。そして着想にもそれ程珍らしいものはないやうだ。サンソンは下ロレーンに於て、雨量と作物との關係を出して居る。

氣候誌はユーゴスラビア、マダガスカル、キューバ、インド支那、滿洲の各地にわたつて居るけれども、もう少し方々の氣候に關する報告が揃つてもよきやうに思はれる。一般に氣候誌の方は微氣候に比して舊套依然たるものが多いやうである。

以上は甚だ粗末な紹介である。通覽して著しく目につくことは單に佛語の論文が多いのみならず、學風も亦フランス流のものが大多數である事である。換言すれば、この會は追々その國際的色彩がうすくなつて行くやうに思はれるのであつて、時機を失せざる内に、獨逸及び北歐の諸國を加盟せしむることが甚だ必要な事なのである。二三の獨逸系の人々——レーマン、ヌスバウム、フォッセラー、イエーガー、シュナイダー等——が加つただけでも、劍橋の時に比べて討論その他に面白味が出て居るから、眞の國際地理學會が開催されたときの興味と利益とは全く想像を許さぬものであらう。敢て識者の一考を煩はす次第である。(今村)

○京都美術大觀(庭園篇)

中野楚溪著

東方書院

發行 定價五圓

京都美術大觀の第二卷として、京都古庭園一面を選んで美はしき寫眞版集にしたもの、卷頭に日本庭園總論といふ略史が三十頁程ついてゐる、圖版には一々簡單な解説がある、只其地を踏むものに取つて勿論であるが遠い國々の人々も、之によつて日本に於て發達した庭園といふものゝ概念が明になり、時代と共に進歩した好尚がわかるのは、何よりの賜である、但しかうしたものは説明よりは繪であつて、百聞一見に如かざることを教ふる資料である。地理學者にもかうしたものを學ぶ餘裕が必要ではあるまいか。(藤田)

○山形縣地誌

長井政太郎著

山形市柵野書店發行

定價一圓六十錢

長井君が山形師範に居て、其郷土地理の闡明に粉骨碎身してゐることは、君を知る人の共に推服してゐる所であるが、君が師範に奉職して六年間、東奔西馳して蒐集した資料は遂にこの菊版二六二頁の縣誌となつた、地形火山、湖沼氣候産業交通人口聚落及地理區の九章よりなつて其説述極めて簡潔要領をつくしてゐる中に、筆者はその産業篇から誠に多くの珍らしい智識を得た、聚落篇は著者の特に造詣がふかい丈けに、珍らしい新開地の移りかはつてゆく姿が見えて、宛然たる一文化史たるの概がある、地誌としては、この外に記すべき多くの事項があるとは考へるけれども、普通の府縣志とちがつて、清新な味を多分にもつことは本書の特色であると信ずる(藤田)

雜報

○工業國としての印度

印度は天與の資源を保有して長く農産の國として天下に知られ、英國の穀倉であると信じられてゐる、しかし近代産業主義の風潮は印度工業勃興の氣運を促し國民主義の運動と相俟つて印度國內の製造工業は發展しはじめ、自ら保護關稅の問題が起ることになつた、熱帶地に工業が起らぬといふことは云へない時勢になつた、これは印度が他の熱帶とちがつて、其歴史も古く文化の高い自然の勢である、元來印度は十九世紀の初期までは殷盛なる商工

業國であつて其絹及綿織物は上古以來聲價を認められ歐洲に多量の輸出があつたのみでなく印度の機械術、染色法、金屬細工、寶石細工、香水製造其他の技巧は一段とすぐれたものであつた、然るに東印度商會が印度に君臨してこの方、其政治的勢力を利用して、印度工業を漸次衰滅に導き印度を英國の市場に變形してしまつたのである、これはアングロサキソン民族の狡猾さを如實に語るものである、一七六九年三月十七日附の東印度商會本社からベンゴール支店宛の手紙には印度織物の抑制を要望し絹工業の家内作業を禁止し、商會附屬工場内で就業せしめよと云つてゐる、さうして彼等千年の誇るべき工業を全く破滅してしまひ、一八二三年には印度産絹織物及絹綿交織物は全然英國市場から影を没するに至り、印度よりの重要輸入品たる綿織物に六割七分の關稅を加へて英國内の工業を保護した、そこで印度の織物工業は行きつまつて反對に英國の機械による安價な綿製品が漸次東方の各領地に其姿を顯はしたので工業國印度はまたくまに農業國印度に墮落した、ひとり綿工業のみでなく、造船業でも、一八〇〇年にはベンゴールの豊富な木材で現に一萬噸の印度製航洋船舶がカルカッタ港に集合してゐる、それで英印貿易に必要な船腹は印度造船所に於て出來るといひ、ロンドンの造船業者は著しく脅威を感じたものであつた、英國のこの手段は現在日本の綿業に向つても行はんとする所であるが、日本の立場といひ時代もかはつたので思ふやうにはならないけれ